

大気社のマテリアリティ

大気社では、優先的に取り組むべき経営上の「重要課題」として「マテリアリティ」を特定し、評価と検証を行い、CSR活動のPDCAのサイクルを確実に回していくことが大切であると考えています。

マテリアリティの見直しについて

2017年6月に「マテリアリティ」特定後の社会変化を踏まえ社会の持続可能性(ステークホルダーの期待)と、自社の持続可能性(長期的な成長への影響度)の双方を見据えて、あらためて重要度評価を実施しました。

今回、経営トップが主体となり、取締役会メンバーによる討議、妥当性の確認(アンケート調査)を経てマテリアリティを見直しました。

「CSRマテリアリティから経営のマテリアリティへ」を重要論点とし、長期視点でのありたい姿とその実現に向けた道筋・方向性を見据え、「持続的な価値創造の実現を可能とするビジネスモデルの構築」を最大の目的としました。

今回の見直しの主なポイント

(1)社内の視点:取締役会メンバーの認識を可視化

取締役会メンバーの、現時点における、マテリアル(重要)な経営課題に対する認識を、役員ディスカッションをベースに可視化。

(2)外部のモノサシの視点:マテリアリティ候補リストに経済価値の側面を加味

社会的責任に関わるESG要素だけでなく、財務へのインパクトも踏まえた企業価値視点でのESG要素もマテリアリティ候補リストに加味。

(3)Afterコロナの視点:激変するからこそ求められる長期視点として“Afterコロナの世界観”を踏まえた要素を加味

●当社におけるマテリアリティの進化

2017年～これまで

CSRのマテリアリティ

企業の社会的責任を果たすと同時に企業価値向上を目指すためのマテリアリティとしてスタート

2020年～現在

長期的な視点でのありたい姿を見据えたマテリアリティ

マテリアリティの目的を「持続的な価値創造の実現を可能とするビジネスモデルの構築」とし、マテリアリティを見直し

2020年～これから

取締役会を含む経営層で継続的に討議し、特定したマテリアリティ相互の関連性の整理、KPIの設定なども検討

マテリアリティ特定プロセス

社会的責任に関わる従来型・網羅視点の各種フレームやガイドラインに加え、統合報告フレーム、SRI(社会的責任投資)の視点、グローバルリスク、SDGsなど、サステナビリティを取り巻く新たな課題も幅広く考慮に入れ、マテリアリティ候補を設定しました。外部基準による重みづけ評価として外部フレーム・ガイドラインに基づいた、社会全般の認識としての重みづけに加え、当社の主要な顧客のマテリアリティに基づいた客先目線の重みづけを定量化・可視化しました。

候補リスト策定(課題の抽出)

重要度の評価(外部ステークホルダーの視点、事業へのインパクトの2軸)

妥当性の確認・討議

特定(更新)

役員コメント(抜粋)

- ・企業理念「永続的に成長し、社会に貢献する会社づくり」の実現に向け、現在の経営資源を将来のために有効活用する視点が大切。
- ・外部基準や客先目線での重要度を踏まえ、当社としての優先課題を設定したい。たとえばSDGs、ESGなどの社会的要請の高い事項をさらに取り込んでいく必要がある。
- ・重要であるがあまりに当然な項目やすでに重要視されている項目はあえて指摘されない可能性もあるが、そうした守り(基盤)の要素があってこそ攻め(発展要素)が成り立つ。基盤の上に発展要素を積み重ねる二階建てのイメージで捉えたらどうか。
- ・「次世代ビジネスモデル」としての独自性・納得性のあるエッジの効いたコメントメントを目指したい。
- ・地球環境問題に対する意識が一段と高まるなか、エネルギー・空気・水に関する対応を「社会貢献努力」を超えた「事業ドメインにおける先進的コンセプト」としてマテリアリティに盛り込むことが当社の優位性につながるものと考える。

新たなマテリアリティ体系

「持続的な価値創造の実現」を可能とするビジネスモデルの構築のため、当社の強みやDNAを活かした8つのマテリアリティを
1.経営・事業戦略に直結する項目と、2.社会価値を創出する項目に分けて特定したうえで、さらにそれらを実現するうえで必須な
3.「経営インフラ基盤」を整理しました。

〈目指すべき方向性〉「持続的な価値創造の実現」を可能とするビジネスモデルの構築

1

- 技術競争力・イノベーション力の強化
企業競争力、顧客満足の源泉であり、新たな事業を生み出すエンジンにもなる技術力、イノベーション力を高めていく。
- グローバルな社会課題への取り組み
ESG等の新たな事業を生み出し、また、ビジネスモデルを強化する機会として、戦略的に取り入れていく。
- デジタル革新と生産性向上
ビジネスとして、また、労働生産性の向上(働き方改革推進)の一環として、テクノロジー導入・活用。

2

ESGの各領域で社会価値を創出

環境(E)

- 気候変動の緩和と適応
温室効果ガスの排出削減と吸収の対策を行う「緩和」と、すでに起こりつつある気候変動影響への防止・軽減のための備えと、新しい気候条件の利用を行なう「適応」と両面を想定。
- 汚染防止と環境負荷低減への取り組み
大気汚染の防止、化学物質の管理など。

社会(S)

- 人材確保と人材育成
価値(イノベーション)を創出し、競争力を支える優秀な人材を確保し、定着を図り、育成していく。
- 働きやすい職場環境の整備
ダイバーシティ、多様で柔軟な働き方、ワークライフバランス、働きがい・従業員満足の向上。

ガバナンス(G)

- 実効性の高い
コーポレートガバナンス
ブランド価値の毀損や財務上の損失を回避し、自らのビジネスモデルを実現するための戦略を着実に実行し、持続的に企業価値を高める企業統治の仕組み。

3

持続的な価値創造を実現する上で必須な「経営インフラ基盤」

ビジネスモデルの持続可能性を見据え、整備していかなければならない基盤。

- コンプライアンス ● リスクマネジメント ● 品質/安全 ● 情報セキュリティ ● 地域社会への貢献

大気社グループが事業を通じて貢献する主なSDGs

大気社グループは、持続可能な社会の実現のために世界全体で取り組む共通目標である「持続可能な開発目標(SDGs)」を支持し、より事業への結びつきが強い目標を中心にSDGsの達成に向けた取り組みを進めています。

